学術思想

アルチュセール批判の書

フランス現代哲学の認識論の対立

的場昭弘

ポール・リクール著

イデオロギーとユートピア

社会的想像力をめぐる講義

A5判・502頁・5880円
新曜社
978-4-7885-1235-1

この書物は、基本的にリールへの手紙」（『マキャクールによるアルチュセール批判書である。マルクスを含めたいろいろな人物が引用されているが、リクールが批判するもっとも重要な人物はアルチュセールである。だから、リクールとアルチュセールとの対決の歴史を知らずして本書を理解することはできない。二人の対立は、一九五二年に開催された歴史家と哲学者との合同会議に始まる。リクールは、そこで「歴史における主体性と客観性」という報告を行い、翌年『哲学教育雑誌』にそれを掲載する。この論文に対しアルチュセールは、二年後「歴史の客観性　ポール・リクールも、自伝の類の中でお互いについてほとんど触れていない。しかし二人のこの問題をめぐる確執が相当のものであったことは確かである。二人の理論的対立は、フランス現代哲学の認識論の対立そのものであったからである。それは人間の意志を問題にする哲学と、意志を越えた社会的構造を問題にする哲学との対立である。

アルチュセールは、一九六六年六月「哲学の状況とマルクス主義の理論研究」（『政治哲学論集Ⅱ』藤原書店所収）という講演でフランス哲学の現況を総括し、デカルト的唯心論回帰の動きがあることを指摘し、その主要人物としてリクールの名を挙げている。そしてマルクス主義は、こうした哲学に対して科学的認識論の哲学であると述べるのである。

リクールの反撃は、一九六八年五月革命後彼がパリ十大学の学長を辞任した後、アメリカのシカゴ大学で始まる。一九七三年の講義がそれであり、本書はその講義録である。英語で出版されたのは、一九八〇年のアルチュセールの妻殺害以後のことであり、フランス語での出版は彼の死後であったため、後者による反批判はありえなかった。

本書の骨格はこうである。その批判対象はアルチュセールであり、批判の根拠はマルクス理論の解釈と、「イデロギーとユートピア」に対するマルクスの解釈にあり、リクールの主張の援軍として登場するのは、マンハイム、ヴェーバー、ハバーマス、ギアーツである。

アルチュセールが、マルクスはイデオロギーと科学を対立させる方法論を取ると主張するのに対し、リクールは、マルクスは終始イデオロギーと実践を対立させていると主張する。前者は、イデオロギーから抜け出た客観的構造こそマルクスの方法だと主張するが、後者はマルクスの方法は、イデオロギーと個人の意志と実践を対決させたことにあると主張する。前者の課題は客観な構造分析であるが、後者の課題は個人の意志の分析にある。

二人は人生においても好対照である。二人とも第二次大戦中長い抑留生活を送ったが、リクールがフッサールの書物と出会うのに対し、アルチュセールはフォイエルバッハの書物と出会う。前者がアラン、マルセル的意志の哲学を継承するのに対し、後者は構造主義の哲学を継承する。もっともマルクスとの出会いは、リクールの方が早い。

二人の主張のいずれが説得的かは、読者の判断に任せたい。内容を解く鍵は、現在と過去の構造や観念との関係をどう理解するかにある。現在を人間の意志を抜きにした構造として理解するのか、それとも過去の意志の反映として理解するかがポイントである。二人の対決から、観念論と唯物論の内容が、まったく違った形で見えてくるはずである。（川崎惣一訳）（まとば・あきひろ氏＝神奈川大学教員・社会思想史専攻）

★ポール・リクール（一九一三～二〇〇五）は現代フランスの解釈学的現象学を代表する哲学者として活躍。著書に「解釈の革新」「生きた隠喩」「フロイトを読む」など。